

訳者による序文

一柳満喜子は、明治、大正、昭和を生きたくリスチャンであり、教育者であり、ウイリアム・メレル・ヴォーリズ（一柳米来留）の妻である。

メレルは、一八八〇年に、アメリカ合衆国カンザス州に生まれた。コロラド大学で建築家を目指していたものの、在学中に学生YMCAや海外伝道学生奉仕団に関係したこともあり、一九〇五年、YMCAの仲介で英語教師として来日した。赴任先の滋賀県近江八幡市では、商業学校の生徒らに英語を、そして放課後の「バイブルクラス」でキリスト教を伝えた。

だが、この「バイブルクラス」が問題となり、のちに商業学校を解雇される。しかしながら、メレルは建築事務所を開設し、日本に留まり続けた。これが、旧下村邸（大丸ヴィラ）、旧大同生命ビル、関西学院大学、神戸女学院、明治学院礼拝堂など、一連の「ヴォーリズ建築」のはじまりとなる。そして、「バイブルクラス」の生徒であった吉田悦蔵、村田幸一郎らとともに近江ミッション（近江基督教伝道団、現在の近江兄弟社）を結成し、医療（サナトリウム、現在のヴォーリズ記念病院）、製菓（メンソレータム、現在のメンターム）などを展開した。一九四一年には日本に帰化し、終戦後はSCAP（GHQ）と日本政府をつなぐ使者として活躍した。天皇の人間宣言に関与したともいわれている。

満喜子は、一八八四年（明治一七年）に子爵一柳末徳（一八五〇—一九二二）を父に、東京で生まれた。末徳は久鬼隆都の五男であり、播磨小野藩の一柳末彦の養嗣子として家督を継いだ。また、母の栄子は、伊予小松藩主の一柳頼紹の娘である。明治は知識層たちがキリスト教に傾倒していた時代である。末徳もキリ

スト教に接し、満喜子をミッシン系幼稚園に通わせた。その後、女子高等師範学校や神戸女学院で学んだ。父・末徳との不仲から、兄恵三の養子先である廣岡家に身を寄せ、一九〇九年（明治四二年）に渡米した。当初、プリンモアカレッジで学ぶものの、女学校時代に英語を学んだアリス・ベーコンのもとで生活をはじめた。一九一七年（大正六年）に、末徳危篤の知らせを受け、帰国する。このとき、津田梅子の後継として女子英学塾（現在の津田塾大学）の二代目塾長へ招聘されたが、再び渡米する予定であったことから固辞した。そのような状況で出会い、伴侶としたのがメレルであった。

しかし、華族出身者と外国人との結婚というのは、例がなく、周囲の反対が多かった。それを救ったのは、成瀬仁蔵とともに日本女子大学校（現在の日本女子大学）の設立に尽力した恵三の義母廣岡浅子であり、華族の身分を捨て平民一柳満喜子として、メレルと結婚する。

結婚後は、メレルの活動の拠点であった近江八幡に住む。しかし新婚当初から、満喜子の華族としての地位などが災いして、近隣の人々との交流が難しかった。さらに、メレルは建築をはじめとする近江ミッシンの活動のために家を空けることが多かった。その寂しさを埋めるために、「プレイグラウンド」をはじめた。賀行き場として、十分な教育がなかった近江八幡の子どもたちのために「プレイグラウンド」をはじめた。賀川豊彦は、近江ミッシンの事業について「一番の欠点は、教育事業のないこと」と語っていたが、その教育事業を担ったのが満喜子であった。

近年、夫のメレルについては建築家、社会事業家として注目され、数々の書物が公刊されているが、満喜子については、あまり知られていない。満喜子は、自らすすんでものを書くことをせず、依頼による講演や執筆が多く、満喜子を知る史料はほとんど残っていないことが、その原因だろう。

断片的ではあるものの、学校通信などの満喜子による文章の一部が一九五九年（昭和三四年）と一九七二

年（昭和四七年）に文集としてまとめられているが、多くが未整理あるいは行方不明となっている。新制学校制度になってからの高校第三期卒業生たちが、『忘れられない教育者一柳満喜子先生の思い出「満喜子先生ありがとう」』を二〇〇六年に出版している。ここでは、第三期卒業生たちが満喜子の思い出を綴っており、断片的に語られるのみであった学校での満喜子の姿を知るうえで、貴重な史料となっている。

また、華族出身でありながら、満喜子に関する公文書の一切が宮内庁や霞会館に現存していない。さらに、一柳家の系譜がまとめられている『一柳家史紀要』にも、満喜子の名前は登場しない。戦前、満喜子に接していた吉田悦蔵はその著書『近江の兄弟ヴォーリス等』のなかで、また賀川豊彦も『近江の兄弟ヴォーリス等』によせた跋のなかで「聡明」と記すだけで、満喜子についてなにも書き残していない。伝記に類するものとしては、満喜子自身の手による『教育随想』所収の「辿り来し道をふりかえりて」がある。「辿り来し道をふりかえりて」は、満喜子が自分自身について語った唯一の文章といえる。そのようななかで残された書物が、グレイス・フレッチャー (Grace Nies Fletcher) の *The Bridge of Love* であり、本書はその翻訳である。

The Bridge of Love は、ボストンのジャーナリストであったグレイス・フレッチャーが一九六六年四月五日に来日、約一カ月にわたり一柳邸に滞在し、満喜子本人からの直接取材を含めて関係者からメレルと満喜子について取材し、執筆されている。グレイス・フレッチャーが執筆に取り組むこととなったのは、一九六五年に満喜子が渡米し、一月一六日にニューヨークの出版社 E.P. Dutton & Co., INC. を訪れた際、「メレルの生涯は誰かに書かせ、広く読ませねばならない」と出版社がグレイス・フレッチャーを満喜子に紹介したことによる。

主にメレルに関する内容で大半が占められているものの、日本国内での出版が前提ではなかったためか、満喜子の生家での出来事をはじめ、近江兄弟社関係の出版物、また講演などで語られることのなかった極め

て私的な内容も記されている。そのため、本書によってこれまで知られてこなかった満喜子についての理解を助けるものとなっている。

満喜子について知ることは、たんに一人の女性の生涯を検証するにとどまるものではない。近江兄弟社における教育事業はもちろんのこと、メレルの事業成功における満喜子の人的交流の役割など、これまで知られてこなかったメレルの、新しい姿の発見が可能となる。また、日本近代女性史、さらには日本キリスト教史を見直すうえでも、メレルや満喜子について知ることは意義深い。

まずは本書の出版が、メレルや満喜子を多くの人々に知らせる機会となることを祈るまでである。

二〇一〇年初秋

平松 隆円